

「ちょっと背中を叩いて。」と、夫が度々息苦しさを訴えるようになった。私は背中を叩きながら「家で仕事の準備もしているし、家事も一人でしている。苦しいなら煙草をやめて欲しい。」と、夫が反論できない状況をよいことに、不満をぶつけた。

夫は、数年前に肺気腫と診断されていた。医師からも禁煙を勧められていたが、やめる気配はなく、症状も年々すすんでいた。

ある朝、一泊二日のバスツアーのチラシが目にとまった。行く先は未だ行ったことのない亡き義父の故郷徳島が含まれる四国である。バスは二日間とも禁煙になっていた。「これだ」と夫にチラシを見せて、行こうと誘った。

今迄、子供達と一緒に家族旅行は何度もあったが、子供が社会人となり、夫婦二人だけになってからはなかった。私も夫と行くより娘と一緒にの方が気楽でよいと考えていた。しかし、今回はちがう。夫が煙草をやめるきっかけの旅にしたかった。またとないよい機会と考えた。

夫に話すと「自営なのに旅行する暇はない。二日間の禁煙は無理。」と、話を聞こうともしなかった。そこで私は「もうこの生活を終わりにしたい。不摂生な生活につき合えない。離婚も視野に入れている。」と、譲らなかった。しばらくの沈黙のあと「二人で行こうか。おやじの故郷にも行ってみたい。」と言った。私はその場で旅行を申し込んだ。

旅行当日、かばんに多量の禁煙サポートガムとおつまみを入れ出かけた。バスが九州を離れた頃から、夫の額には汗が見られ、ガイドさんの案内も上の空の様だった。私は用意していたガムを箱ごと渡した。「大量に準備してたんだ。」と言い、度々ガムを口にしながらホテルに着いた。夕食の後、夫の好きな酒を買い求め、部屋で「お父さんの今日一日の頑張りど、禁煙成功に乾杯。」と、私も久しぶりに酒を口にした。

翌日は、義父の故郷である大歩危、祖谷のかずら橋方面の観光だった。一日目は禁煙の事で頭がいっぱいで景色を楽しむ余裕はなかった。しかし、二日目になると、大歩危の船からの景色に二人で歓声を上げ、かずら橋ではスリルを味わった。夫も、一日目より禁煙サポートガムでの調整に慣れた様で、笑顔が増えた。

旅から帰ると、夫が「煙草はやめる。暫くは、禁煙サポートガムに頼る事になると思うけど。」と言い、残っていた煙草とライターを自ら処分した。看護師として働いている娘が、「禁煙外来に通っている人でもなかなかやめられないのに、二日間の旅行で決心し、実行しているお父さんを尊敬する。」と言った言葉も後押ししたと思うが、四国旅行のあと煙草をきっぱりやめ、健康的な生活に心がける様になった。家事を二人でする事もある。

旅という非日常は、自分を省みる心のゆとりをもたらすよい機会となった。そういう意味では、今回の四国旅行の意義は大きかった。お互いの優しさに気づき、夫は禁煙することができ、健康に対する意識も変わった。また、2人で旅をしたいと思っている。